日上市立平沢中学校 教諭 本木 真希子

- 1 派遣期日 令和5年6月23日(金)
2 派遣先 学校名(会場名) 千葉大学教育学部附属小学校
所在地 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33

3 研修内容

研究テーマ

生徒が没頭して取り組む授業の教材や教育内容の具体的な手立てについて研究する。

4 感想

本校の理科の授業では、理科を学ぶことの意義や有用性の実感及び理科への関心を高めるために「日常生活や社会との関連を重視した授業」を展開するよう心がけている。

そこで、千葉大学教育学部附属小学校の「子どもが没頭する授業」という研究テーマの授業を参観し、「夢中が本質に繋がる理科学習」というテーマで研究協議を行うことで、授業の具体的な手立てについて学び、本校の授業の取り組みに活かしていきたいと考え、先進校視察に千葉大学教育学部附属小学校を決定した。

開会式では、研究の主題についての説明が行われた。千葉大学教育学部附属小学校では、児童のどのような姿を大切にしているのか議論した結果「子どもが没頭する授業」という新たな主題が設定された。設定後に、職員から「没頭とはどういう姿か」「学校として没頭をどう捉えているのか」という質問が多く挙げられたようである。昨年度までの研究は、「没頭をどう捉えるか」は意識せずに進められてきたことが課題となり、その課題を解決するために、研究全体会を設け、教員同士、「どのような価値観をもっているのか」「何を大切に教育しているのか」「何を考えているのか」など、コミュニケーションをとる場を構築するところから始めたようである。しかし、はじめの頃は、ただの報告会になったり、一部の職員の意見を聞く場になったりただけで、職員からは「忙しい時になぜこのようなことをしなくてはいけないのか」という意見がでたり、研究に対する温度差が見られたりするなど、「教員の意見を共有するのに苦労した」という課題研究主任の言葉が非常に印象的だった。

千葉大学教育学部附属小学校で考える、児童の没頭とは、①「児童自ら学んでいる姿」(受け身にならない、「自分でしよう」と意思決定して取り組む、一生懸命、熱心に取り組む、必要性をもって取り組む等)②「考えながら学んでいる姿」(思考し続ける、思考錯誤する、情報を精査する、よりよくしようとする、考えを修正する等)③「他者を係わりながら学んでいる姿」(友達と一緒に活動する、友達や教師を参考にする、聞く等)という3つの姿と捉えた。

同じように授業の在り方として、①授業の枠組み(ある程度は必要であるが、学習内容を逸脱しない範囲での逸脱を強要する)②没頭へのトリガー(強制的に没頭させるのではなく、自然と没頭状態に入っていくことの重要性や教師の手立てをいかに工夫していくのか)③教師の立ち位置(教師の見とりや関わり、量ではなく質としての重要性)という3つの姿と捉えた。

校内研究から、教師の「願い」や取り組むべき価値を実感できる校内研究の方針が「見える化」することで、今年度、本研究の目的とする、「学校全体の『子どもが没頭する授業』」を「教員の意見を共有することが難しかった」という苦労を乗り越え、「職員全員で取り組みたい」という、課題研究主任の強い気持ちと行動力を素晴らしく思った。そこで、千葉大学教育学部の「先生方の思い」と「生徒が没頭する授業」の意味を少し理解して、授業参観に臨んだ。

1時間目の理科の授業では、「ものの燃え方」の授業が公開された。燃えていたものの正体は気体のロウであることを確認するために、ろうそくの炎をうつばさみでつまみ、空中に浮く炎を再現した。「すごい」「やってみよう」という声が挙がり、原因を突き止めたいという知的好奇心を高めるような授業の導入であった。学習の中では、児童が実験を進めながら、考えを更新していくことが必要となり、実験開始時には、白い煙が燃えているのではないかと考え、学習を進めていくが、途中から白い煙の正体は何かといった点に検証すべき内容が変化していった。児童の思考としては、「白い煙が燃えているのかも」といった考えから、「白い煙はどこから出ているのだろうか」「ろうって燃えるのだろうか」「気体のロウには火がついた」などと各場面において事実を整理しながら、検証すべきことをが明確になるように、児童が夢中を継続させながら、本質に近づこうとする授業の展開は、素晴らしく思えた。しかし、

結果のまとめまでの時間は十分に確保できずに終わってしまったのが少し残念に思えた。

2時間目の理科の授業では、「音のふしぎ」の授業が公開された。音の大小と高低の振動の差異に着目するために、前時に作成した、ストロー笛や輪ゴムギターで音の振動を確認し、本時では、音の振動を確認できるおもちゃを作成し、児童たちが体験を通して、課題を解決できる授業となった。また、音の高低を変え、ものを振動させる活動を通して、音の大小と高低による震え方の差異に着目しながら、音の性質と振動との関係性についてのまとめが分かりやすく、楽しく、学びのある授業となった。

同じく、2時間目の総合的な学習の時間では、ダイバーシティとどのように向き合うか、構造的な差別を除去する必要性について考えを深める授業が行われた。帰国子女の児童達のダイバーシティを確認したり、世界的にも高い水準でD & Iに取り組んでいると評価されている株式会社 ZOZOの方に取材する機会を設定し、個々のダイバーシティを尊重するとともに、社内規定の改定や多様な働き方を支援する制度の導入など構造的な問題に取り組む企業の姿勢について目を向けさせる授業展開は興味深いものだった(D & Iとは、「ジェンダー」「LGBT」「障害」「多文化共生」「育児・介護」の5つの観点で構成された100項目のダイバーシティスコアをもとに企業のD&Iの取組みが採点され、4つのレベルの認定「(ビギナー/スタンダード/アドバンス/ベストワークプレイス)」の中から、採点スコアに応じて認定されるもの)。また、構造的差別はマジョリティにとって気づきにくい問題であり、「思いやりや優しさ」では、個人が無意識に行ってしまう差別的な言動や態度まで改めることができないことを児童達に伝え、児童達に揺さぶりをかけ議論の質を高めようとする教師のファシリテーターとしての役割がちょうど良く行われており、帰国学級の児童と一般学級の児童の議論が活発に行われた。この授業の取り組みを生かして、マイノリティとマジョリティなどの特権や苦悩を可視化するなどして、今後、道徳や総合的な学習の時間でも本校で取り入れたい内容だと感じた。

3時間目の美術の授業では、「つつむ」のイメージを共有するために、包装紙、布、紐、リボン、大きな流木などの様々なサンプルが用意されており、「つつむ」のイメージ共有がスムーズに行われていた。実物を用意できないものは、画像を準備して共有を行った。「エッフェル塔をつつみたい」という壮大なイメージを行う児童も見られ、話し合い活動が活発に行われた。「つつむ」を書き表すために、6Bから4Hまでの様々な鉛筆が準備しており、児童たちは、自分の「つつむ」を表現するには、どの鉛筆が良いか悩む姿が印象に残った。様々な鉛筆を準備することで、児童の多様な表現を引きだそうとした工夫が素晴らしいと感じた。

同じく、3時間目の体育では、「音を感じて表現しよう」ということで、「自分なりに音を感じて身体表現できる」「曲調の違いを感じ、どのように踊るか考える」ことを目標に授業が行われた。「ロック調」「サンバ調」の曲を中心にいろいろな曲をかけると、児童たちは、笑顔で汗を流して、全身を使って踊る姿が印象に残った。前時で、まねっこダンスや円形ダンスを取り入れて、一人一人が楽しく活動できるように単元構成が行われていたので、本時では、恥ずかしさや、どのように踊ればいいのかわからないという児童の姿は見られず、もっと踊りたいという雰囲気を感じた。選曲や曲の順番や「身体のどこを動かすか」「空間をどう使うか」など新たな課題を提示することで、1時間の授業を飽きずに、音を感じて生き生きと身体表現する姿が素晴らしいと感じた。また、授業終了後の整列から退場の動きも、曲に合わせて生き生きと活動する姿が印象に残った。参観した授業はどれも、強制的に没頭させるのではなく、自然と没頭状態に入っていくことの重要性を大切に、教師の手立てをいかに工夫していくのかを追求したり、様々な現象を視覚化するような教材を活用したりしていた。授業における観察や実験を通して空間的なイメージをすることは、多くの生徒に対して、学習上有効であると考える。授業の導入で「視覚化」「空間的イメージ」を行うことで、「たのしい」「おもしろい」「なぜだろう?」「どうしてだろう?」と興味関心から「疑問」が生まれ、授業の『つかむ』という課程が充実したものになっていた。また、生徒から出された疑問から、「～を知りたい」「～を調べてみよう」と「追求する」姿勢が素晴らしく感じた。今後の授業でも活用したいと感じた先進校視察となった。千葉大学教育学部附属小学校で学んだ「教師の手立ての工夫」「視覚可」「問いの生成」などを意識して、10月からの内地留学では、生徒の実態を把握し、学びの手応えを感じることができるような教材開発の工夫や、学んだことと日常生活とをつなぐ工夫の研究を行っていきたいと思った。